

ひとりのアマチュアが世に問うた著作が考古学、古代史の研究者の間に徐々に波紋を広げている。

「まぼろしの古代尺——高麗尺はなかった」(吉川弘文館)。古代の尺度として、約二十六・八センチの基準尺(「古韓尺」と仮称)が存在したことをコンピュータを用いて統計的に立証、ほぼ定説のように考えられている「高麗(こま)



新井 宏さん

尺」(約三十五・六センチ)の存在を否定している。

著者はステンレスのメーカー、日本金属工業の研究開発本部副部長、新井宏さん。金属工学の分野で多くの賞を獲得している工学博士だ。

新井さんは、四十八世紀にかけての朝鮮半島と日本の古墳や宮殿、寺院約七十の計測値約千件について、完教(簡単な整数比)度を

古代の尺度は「古韓尺」

定説の高麗尺を否定

アマチュア 研究者 家 古墳や寺院など解析

いう概念を導入して解析、「最もよく合う尺度」として、ほとんどのデータから「古韓尺」を抽出した。また、韓国・慶州にある南山新羅碑(六世紀)に見える碑文の解釈からも、初めて二二・六・九センチの基準尺を見

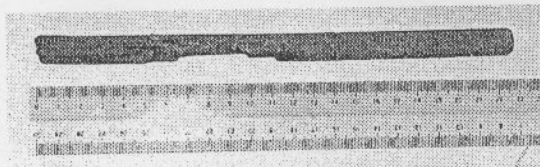
律令制の導入に伴い、尺度が唐尺に統一され、それ以前は高麗尺や晋尺が用いられたとされている。「高麗尺」の根拠は、①九世紀の律令注釈書『令集解(りょうのしゅうげ)』に測量法として「高麗術」

の記述がある②中国北朝系「東魏尺」とほぼ一致する③法隆寺や四天王寺などの計測データから検出できるとは、などだが、いずれも証拠能力が弱いと、計量史研究者の間では早くから疑問の声が上がっていた。に

・奈良大学教授(建築史)も「時間をかけて考え直してみたい」と重大な関心を寄せている。しかし、考古学の分野では「読んでいない」とする研究者が多く、アマチュアの論文であることが壁になっていることも事実だ。

いたし、「古韓尺」の存在を裏付けている。その上で、「古韓尺」から新しい単位の「唐尺」(二二・九・六センチ)に移行したのは七世紀の中ごろで、地方寺院などでは八世紀中ごろまで「古韓尺」が用いられていた、と結論付けた。

さらに、その後の論文でも静岡県浜松市の伊場遺跡から昭和四十年代出土した奈良時代の木製の「ものさし」に「古韓尺」の目盛りが刻まれていると指摘、自説の補強に努めている。日本の尺度については、



新井さんが「古韓尺」の物的証拠と指摘している静岡県・伊場遺跡出土の「ものさし」

もかわらず、歴史学・考古学者の間で定説のように扱われてきたのは、「尺度論」のバイブルとされる昭和初期刊行の『尺度綜考』(藤田元春著)を無批判に信用してきた結果だ、と複数の研究者が認めている。新井さんの論考について、鈴木靖民・国学院大学教授(日韓古代史)は「歴史的背景の考察は不十分だが、数字は非常に説得力がある」と肯定しているほか、法隆寺の伽藍配置は「高麗尺」の七十五尺を基準にして

にもかわらず、その精密な検証を省略してきたのは、学界の怠慢と言われても仕方がない。「古韓尺」そのものの当否はともかく、本書が重大な問題提起の書であることは間違いない。研究者はこの成果を真剣に受け止め、それぞれの立場から反論や援護射撃をしていく必要があるだろう。

片岡 正人記者